

「弟子たちを宣教に遣わす」 2014年08月23日

マルコによる福音書6章6b節～13節。それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を受け、旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。また、こうも言われた「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようとしめない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落としなさい。」十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。

主イエスは村々を巡り歩いて神の国の宣教に全身全霊を費やされた。民衆は群がり、喜びに満ちた大きな宗教運動が展開していった。この時「これと思う人々」12名を任命し、使徒と名付けた。任命した目的は、マルコ福音書3章14節～15節に① そばに置くため② 派遣して宣教させ③ 悪霊を追い出す権能を持たせるためであったと書かれている。②と③は当然であると理解できるが、①が大切である。主イエスから離れた宣教はあり得ない。ところが、時として、主イエスと関わりのないキリスト教宣教が行われることがある。それは、自己拡大の欲望を追求し、人間を否定する方向に必ず向かう。主イエスの傍にいて「生の絶対的是認」の福音に聞き従うところで、真実な宣教がなされていく。

主イエスは二人一組にして、宣教に遣わされた。一人では心もとない。二人だと助け合える。そして、二人以上の証言によって、真実が証明されるというイスラエルの伝統を踏まえたものであった。この宣教に際して、諸注意を語られた。一本の杖を持つ。これは襲ってくる猛獣から身を守るためであろう。履物を履く。使徒たちは埃だらけの道を履物で歩き続けた。その他には何も持たない素手の宣教である。ここには、神が守り先導される、また主イエスからいただいた権能が切り拓くという信仰がある。今日、これがあれば、あれがあれば、宣教できるのと思うことがしばしばある。しかし、全くの素手で宣教した例は、世界宣教史において、枚挙にいとまがない。神の守りと先導、主イエスの権能に与っていることへの信頼を、深く考えてみる必要がある。

使徒たちの宣教は、村に入って一軒の家に留まり、そこから一軒一軒を訪ね「シャローム」と挨拶し、神の恵みを語ることであった。その際、村を離れるまで、良くて悪くてもその家に留まれと注意している。隣の教会の牧師であつたら良かったのにと思ったら、腰が据わらないだろう。そして、宣教が受け入れられない場合には、足の裏の埃を払い落して出て行きなさいと言っている。埃を払い落すのは、異教地から帰った時、異教の汚れを払う仕草である。主イエスは「拒否」を認めている。ただし、神がおられる「証として」の拒否であると言っている。マタイ福音書10章13節に「家の人々がそれを受けるとにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる」と書かれている。拒否されても怒ることはない。神の平和があなたに返ってくると言われる。何と優しい心遣いであろうか。12使徒たちは、このように宣教に遣わされ、神の恵みと祝福を伝える大きな成果を得ていった。